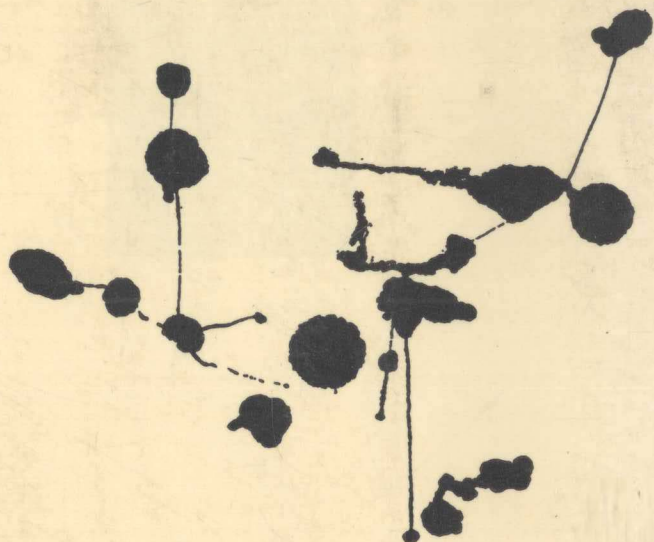
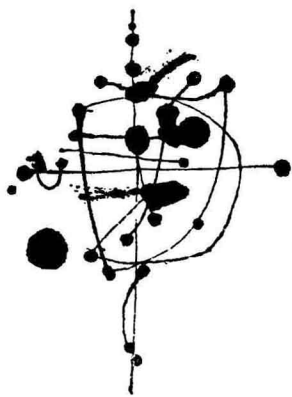


有吉佐和子

紀ノ川



有吉佐和子
紀ノ川



新潮社版

紀ノ川

有吉佐和子選集第一卷

昭和四十五年四月二十日 発行
昭和五十三年八月三十日 十四刷

定価 九五〇円

著者 有吉佐和子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒182 東京都新宿区矢来町71
電話 編集部 03(266)5111
編集 03(266)5411
振替 東京四一八〇八番

印刷 塚田印刷株式会社
製本 株式会社大進堂

© by Sawako Ariyoshi, 1970, Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

墨 江 地 紀
口 の ノ
里 唄 川
目 次

327 299 259 7

装
幀

難
波
淳
郎

紀
ノ
川

紀
ノ
川

第一部

今年七十六歳になる豊乃とよのは、花の手をひいて石段を一步一步、ふみしめるように上って行った。三日前から呼びよせてある和歌山市の髪結女の手で、彼女の白髪はくはちも久々で結いあげられていた。小さく鬢びんを張り、髷まげもその齡には珍しく大きく出ている。若い頃の黒髪はさぞ見事だったろうと偲しのばれるほど、白くなった今も髪は多くて艶つやを失っていないのだった。小紋の重ね着という盛装で孫娘と手をつなげば、石段を上るにも手をひかれる齡が逆に花の手をひいているように見えるのである。それは紀本きもとの大御おおいっさんと呼ばれる貫祿くわんりくというものであり、花が紀本家を出る今日、豊乃に何かの決意があるからでもあった。

早春の九度山は、朝靄あさぐさに包まれていた。花は左手に祖母の強い力を感じながら黙って石段を上りきった。髪は高島田に艶やかに結いあげ、濃く白粉おしろいを刷はいた顔は心もち上気して匂うようであった。縮緬ちりめんの振袖は明るい紫で、胸許むねもとに宮迫はこせきの飾りかんざしが長いびらびらを振りあわせて鳴っている。その小さな音が聞えるほど、花も緊張しているのであった。生れて二十年育った家から、他家へ縁づけば花はもう紀本家の者ではない。豊乃の掌は孫にそう教えようとして、それを強く惜しむ祖母の心をも同時に伝えていた。

慈尊院の住職は、前日から聞いていたので弥勒堂の前に立って出迎えたが、これはあらたまつた装ではなかった。御経をあげて頂くのではないからという断わりが前もって来ていたのである。彼は大檀家の大御っさんに丁寧（ていねい）に頭を下げると、

「今日はお芽出とうさんでございます」

まず祝儀を述べた。

「おおきに有難うございます。えらい早うにから伺いまして、ご免なしてよし」

豊乃は鄭重に礼を返した。住職は拝堂をあげてあるから、御用があれば手を叩いてお知らせ下さいと云いおくと、北側の庫裡に姿を消した。孫と二人だけにしてほしいという伝言を承知していたからである。

豊乃は僧を見送ってから、ゆっくりと孫娘を振り返った。かなり上背のある花を見上げて豊乃は満足げに背き、弘法大師の御母公を祀る靈廟弥勒堂の前に伴って行った。

「高野山には、女は入れえへんがのう、この慈尊院までは上れるんやしてよし。そやよつてに、ここは女人高野と云うんやして。花は知ってたわの」

「はい」

「初親上人さんちゆう偉いお方の夢枕にお大師さんが顕われなして、我に十度礼せんよりは我が母に九度拝せよとおしやつたんは知ってたかのう」

「はつきりとは知りませなんだよし」

「お大師さんがほいだけお母さんを敬われたと知れば、女ちゆうたかて阿呆やってええ筈（はず）ないと思わんならんわの」

「そうでございますのし」

豊乃は静かに合掌して眼を閉じた。花も倣^{なま}って手を合わせたが、廟の前の柱にぶら下っている数々の乳房形に気がつくのと、しばらく瞑目^{めいもく}することを忘れていた。それは羽二重で丸く綿をくるみ、中央を乳首のように絞りあげたもので、大師の母公と弥勒菩薩^{ぼさつ}を祀る靈廟に捧げて安産、授乳、育児を願う乳房の民間信仰であった。実物大の大きさのものをから徑一寸ほどの雛型^{ひながた}まで、柱の上の方に沢山吊り下げられてある。まっ白な新しいものが二つ三つある他は、どれも雨風にうたれて古び黝^{くろ}ずんでいた。幼い頃から見慣れていたもののなのに、この日殊更のように花がそれに眼を奪われたというのは、花の母親が花を身ごもったときそうしたように、豊乃も何十年の昔に花の父親を産むときそうしたように、花自身もまた近い将来そうするであろうと考えたからである。市の和歌山高等女学校で女大学^{おんなだいがく}を学んだ花は、結婚の意義と女の役目の一つは子を産み家系を保つことにあると信じていた。産後の肥立ち悪く逝^いった母親に替って花を育てた豊乃が、孫娘が嫁ぐ日二人きりで慈尊院に参ろうとした理由が分るような気がして、花は静かに瞑目した。まだ処女^{ぢよ}でいる彼女に、今この廟の前で願う言葉はなく、傍の豊乃に心を併^{あは}せようとだけしていたのである。

「お住さんがあない云うておくれやったよって、あちへ上らして貰^{もら}おかいの」
「はい」

豊乃と花は開け放たれた拝堂に上って、祭壇の前の畳に坐って再び合掌した。右壇には弘法大師の御影^{ごえい}が、左壇には御母公の御影が飾られてある。ともに大師の直筆と伝えられている。高野山に籠^{こも}った大師が池水に自らの姿を映して描いた自画像と、御母公逝^いいて後弥勒菩薩^{ぼさつ}になられた靈夢を見て追孝菩提^{ぶっけ}のために描かれた曼陀羅^{まんだら}である。この由来を、花は慈尊院の住職からでなく、花の殆ど總ての知識がそうであるように、豊乃の口からきかされていた。

「もうの、何を云うこともないけどの」

ここでは形式的に拝礼した豊乃は、花を省みると咳くように小さい声で云った。

「牀だけは大事にしなさいや」

「はい」

「遠おい処へ嫁くんやよつて、私もあんたの顔をちよいちよい見せて貰えんと覚悟してるんよし。何を云うことも無うても、こないして二人だけになりとうての、一緒に来てもうたんえ」

この朝から、豊乃の言葉遣いは日頃と違って優雅で鄭重なものに変わっていた。聞きようでは他人行儀とも聞え、早くも花を他家の人と見做しているかとも思われたが、盲愛してきた孫を手放す豊乃の寂しさとも聞きとれた。黙って見詰めている祖母の視線を額に感じながら、花も黙ってそれを受止めていた。

幼い頃から花を、片時も傍から離すまいとしていた祖母の愛情は強烈であった。紀本の大御っさんは、息子の信貴さんも孫の雅貴さんも氣に入らんとからに、孫娘の嬢さんだけ可愛がつてなさる。あの分や婿とつて分家させる心算や分らんで、などと噂されていた。雅貴と同じようにその妹の花を和歌山市に数年住まわせて、そのころの女には珍しい高い教育を受けさせたときも、豊乃は一緒に花と暮すために不馴れな町住いをしたものである。大御っさんはやつぱり嬢さんに婿とる氣や、はや無うてなんであない女学者のよな学問させるもんでよ、と云われたものだ。自分がかつた娘で婿とつたよつて、嬢さんにもそないさせるつもりやろかい、いづれ三國一の婿さん迎える氣やろかい、なんせ紀本の嬢さんは器量よしで利発で云うとこのない人柄やけの、と誰かが背いていた。事実、豊乃自身その氣が十分あったようである。若く死んだ花の母親水尾が、姑である豊乃に氣をかねて小さくなって暮していたのを彼女は覚えていた。花に水尾の真似は

させたくない。一人娘に生れて育った豊乃は、自分が受けたような教育を花にほどこすことによつて、花を豊かに成長させたいと願つたのだ。紀州の名家である紀本の家系が、その名のとおりに花によつて花ひらいたと思えるように、花は美貌を備えていた。そして豊乃の願望に^{こた}えて賢く育つていた。茶の湯も奥儀^{おくぎ}を極め、書を能くし、箏^こも免状をとり、豊乃の躰^{しづけ}に言葉遣いも礼儀も正しい分別^{ぶんべつ}を心得ている。家柄に加えて、右の通りならば、もう付け足すべきものはなかった。紀本家のある九度山村、隣接する慈尊院村以下、元官省府ノ^{しやう}荘内の村々から降るように縁談があったのは当然である。

だが、どれにも豊乃は首を横に振つた。彼女の口から花に婿をとつて分家させるという言葉は出なかったが、縁談のある度に豊乃は何かと難癖^{なんへつ}をつけて退けたのである。主な口実は、望む家の格が低いということであつた。高野山政所^{まんどころ}のある慈尊院村の旧家である大沢家から次男の嫁にと望まれたときは、豊乃の妹が嫁入つた先だから従兄弟^{いとこ}の子供同士で血が濃すぎると、理由にならぬ理由を云いたてて反対した。紀本家の当主である信貴は、温厚な人柄で孝心^{あつ}篤く、豊乃に完全に押えられている形なのだった。豊乃の反対を押しきる強気はなく、では花に婿をとるのかと訊き返すのも控えていた。

紀州 紀ノ国 木は多^{おほ}て

嫁をとるなら 花咲かしよ

九度山一番 紀本の娘

こんな毯^{まり}つき唄が歌われていた。節は前からあつたし、文句も大体昔から伝わっていたものを

最後だけそのときで変える習慣があり、子守唄がわりにもつかわれていた。豊乃が娘のころは伊都郡もずっと東の大和に隣接する隅田ノ荘に美女がいたらしく、嫁をとるなら花咲かしよ、隅田ノ荘一番さかえさん、と歌われていたものである。さかえというのは美しいと云われている娘の名前であった。勝気で我儘に育った豊乃は、この見たこともない娘に嫉妬を覚えたものだ。豊乃もかなりな美貌だったのだが、隅田ノ荘のさかえを退けるほどには美しくなかったらしい。

その昔の口惜しさを孫娘が取返したのだ。豊乃が花にかけた願いは大きかった。徳川さんから貰いにきやれても滅多には渡さんぞという強気であったが、実際にはどうするのか彼女自身も方針はたてることができぬまま花を溺愛していたようだ。その内に毬つき唄は九度山のあたりだけでなく伊都郡全体に広まっていた。

明治三十年、花が二十の誕生日を迎えるころ、いつとき下火になっていた縁談が二つ同時に起った。

一つは昔隅田ノ荘を領していて、今は豪族として名家に数えられている隅田家の新家から紀本の遠い縁戚に当る丹生家を通しての申込みである。隅田ノ荘のさかえさんは美しくても家柄の娘ではなく、隅田家に仕える小者の女になったが、花は隅田一族から迎えられたのだ。

「もう花も婚期に晚いというても決して早いとは云えん齡ですよって、お母さんも賛成してくれなして」

と信貴は慎重に、しかしこの度はかなり高圧的に豊乃の意向を訊した。十四、五歳で嫁入りしても世間是不思議と思わぬ時に、十八の盛りをすぎれば花の年齢は親にとって不安を感じさせるのであった。もう強情は張らせない、豊乃の愛情で花を不幸にするわけにはいかないのだと言外に意味は強かった。

だが、豊乃は反対したのだ。

「隅田はんに花はやれまへんな」

「なんです」

「なんでで考えておみ。紀ノ川は東から西へ流れてるわの。紀本から隅田へ行たら西から東で流れに逆らうちゅうもんや。紀ノ川沿いの嫁入りは、流れに逆らうてはならんのやえ。花は隅田はんにやりまへん」

「そんな阿漕おしやったら困りますすな」

「阿漕やないえ。私のお母さんは吉野からこの家に来なした。あんたらのお母さんは大和から嫁入りしてきたんえ。みんな流れに沿うて来たんや。自然に逆らうのは何よりいかんこっちゃ」

「そんなこと云うて、いつまで花を嫁にやらなんだら先行きどないなことになりますんや。それは考えていなさるのか」

「ああ、考えてますわいな。花は真谷へ嫁にやるんよし」

すらりと云い捨てられて、信貴は啞然としていた。紀ノ川のずっと下流にある海草郡の有功村字六十谷の真谷家からも、隅田家と同時に花を貰いたいと、これは竜門の北家を通して申込んできていたのだ。

紀本の嬢さんは六十谷へ嫁にいくんやとし。噂は数日を経ず近隣一帯の村々に知れ渡った。六十谷へ、なんでやね、と不思議そうな顔をする者たちがいた。紀ノ川に限らず河上に棲む者たちには上に居るといふ矜持があったのである。海草郡は、紀ノ川の下流もかなりの下にある在所であった。村の格から云っても官省府ノ莊九度山とは段違いに下る。まあ真谷家は六十谷で一番の名家であり、本家の後つぎの嫁に望んできたのだから、家柄に難のつけようはないが、それにし

ても紀本の嬢さんが興^{こい}入れする相手ではないと誰が思ったのである。

信貴も紀本家の当主として豊乃に反対すべき義務があった。

「そろお母さん、無茶いうもんですわ。隅田はん断わるのと真谷へ嫁にやるのと話は別になしてよ」

「あたりまえよし。隅田はんに関係なく花は真谷へ縁づけるんやして」

「ほな別々で考えまひよな。真谷はんやったら、これまでの縁談断わりなしたと同じ理由で断わらななりまへん」

「なんでよし」

「家の格が、ずいと低いやおませんか」

「なんでよし」

「なんでよし、九度山と六十谷と較べただけでも分りますがな」

「信貴さん、あんたも若いに古いこと云うわして」

紀本家は親も男子をさんづけで呼ぶ習慣があった。豊乃は息子を古いときめつけ、花を嫁にやる相手は家の格ではない、男だ、と云い切ったのである。

「息子も娘も和歌山市に住まわせて教育受けさせたあんたが、真谷の敬策さんの名^な知らなんだとは情けないの、東京の専門学校出なして早うにから太兵衛はん助けて村役場の助役やってなさった。二十四^いの今で、早や村長さんや。紀ノ川沿いを見渡して、この伊都郡にも隣的那賀郡にも、これだけの婿^いさんはいてえへん。家柄やの家の格やのは大黒柱の男あつてのことやしてよし」

こう云われてみれば、信貴には一言もなかった。彼も九度山村の村長を勤めていたから、真谷敬策の名前は新進気鋭として聞き知っていた。が、どうであれ信貴としては隅田一族を親類とす